

「期待と信頼」

2023年9月

河内長野教会牧師 森田 恭一郎

私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛して下さったからです。

(ヨハネの手紙一4章19節)

先日のPTA主催サマーレクチャー^(注1)にて講師の先生より「一労働者としての教員」の視点を持った学校教育の在り方がむしろ教育の質を高める。ただひたすら「生徒のために」と思って献身的に働く教師、それは頑張りすぎて疲弊していく教師になりかねず、かえって教育の質を下げる。だから教師任せにせずみんなで教育に関わろう、と伺いました。またその中で講師の先生から「生徒を肯定し続けるか、否定し続けるか」という問いかけがありました。公立での例をあげて「校則で縛るのは『自由にしたら生徒は荒れるから』という決めつけがあるからではないか。むしろ、校則をきつくすると以前はガラスを割ったりして乱れたが、今は不登校や自ら命を絶つ自己否定になる」とのことでした。

思えば、校則で縛らなくても「みんなしっかりやってくれる」と教師が将来に向けて生徒を肯定し続ける中で教師と生徒との人間関係は、生徒にとって大きな人生経験、つまり人格否定とは反対の人格肯定のかけがえない経験になるに違いありません。そこで講演から考えさせられたのは「期待と信頼」です。生徒を肯定するとは期待なのか信頼なのか。私の勝手な定義ですが、期待とは教師が願った通りに生徒が応えてくれると肯定すること。他方、信頼とはそのように自身で考え思い行動する生徒をそのまま肯定していくこと。軸がこちら側にあるか、相手側にあるかの違いです。かつての文部省が掲げた「期待される人間像」は、文部省が押し付ける期待であったように思えます。今の文部科学省には生徒や保護者を信頼する省庁であって欲しいと期待したいところですが。いや信頼すべきでしょうか？

「清教学園の看板は生徒である」。これは信頼の言葉でしょうね。それでは「清教学園がめざす人間像^(注2)」はどうでしょうか。期待する人間像でしょうか、信頼する人間像でしょうか…。これは建学の理念^(注3)と共に、生徒に対する言葉であるというよりも清教学園がめざす清教学園の教育に対する言葉であると思います。

そもそも信頼とはどこに起因するのでしょうか。相手がこちらの期待通りに応えてくれたから信頼するのでしょうか？ 私は思います。相手に対する信頼は、キリストの贖罪愛ゆえであると。キリストは、相手が期待に応えてくれたか否かに関係なく一方的に愛して下さいました。そこから生まれる、キリストに愛された人間であるという認識が信頼の基盤になります。「私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛して下さったからです」。私たちが愛するのは、相手が自分の期待に応えたからでも、また相手のためにと自分が頑張って愛するのでもありません。キリストが私たち(自分も相手も)を愛して下さる。相手がそれを知らなくても、キリストに愛されている相手として相手を認識する。そこから相手への信頼が生じると確信します。さあ、二学期が始まります。

(注1) 清教学園PTA2023年度サマーレクチャー(2023年8月26日)
「保護者の皆様と一緒に考える学校教育のあり方～学校をみんなで支える、みんなで変える」(講師:内田 良先生[名古屋大学教授])

(注2) 清教学園がめざす人間像
神を信じ 誠実に仕える 真理を学び 賜物を生かす 隣人と共に 平和を築く

(注3) 建学の理念(清教学園)
「神なき教育は知恵ある悪魔をつくり、神ある教育は愛ある知恵に人を導く」